

Ⅱ：分担研究報告

研究 7

民間支援団体における回復プログラムおよびその効果に関する研究

民間支援団体における回復プログラムおよびその効果に関する研究

分担研究者：引土 絵未（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部/
日本学術振興会特別研究員）

研究協力者：岡崎 重人（NPO 法人川崎ダルク支援会）
加藤 隆（NPO 法人八王子ダルク）
山本 大（NPO 法人アパリ藤岡ダルク）
山崎 明義（特定非営利活動法人東京ダルク）

【研究要旨】

【目的】本研究の目的は、民間支援団体ダルク等において新たに導入されつつある治療共同体エンカウンター・グループの有効性を明らかにすることにある。これまでの研究において、治療共同体エンカウンター・グループは一定の効果が認められているが、対照群が設定されていないという課題が残されていた。そこで、治療共同体エンカウンター・グループを実施していないダルクを対照群として設定することを試み、効果検証を実施した。

【方法】治療共同体エンカウンター・グループを実施する A ダルク（9 名）、B ダルク（12 名）、C ダルク（15 名）、D ダルク（10 名）の 4 施設（46 名）を介入群、F ダルク（34 名）、G ダルク（6 名）、H ダルク（13 名）、I ダルク（5 名）、J ダルク（6 名）、K ダルク（9 名）の 6 施設（73 名）を対照群とし、2018 年 4 月をベースライン、FU3 ヶ月、FU6 ヶ月時点で自記式アンケート調査を実施した。アンケートでは基本属性、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、精神科通院の有無、薬物重症度尺度 DAST-20 および、精神的健康を自己実現の観点から測定することを目的とした SEAS2000 を用いた。計 119 名のうち、調査実施 3 時点でのデータのある介入群 4 施設（36 名）および対照群 3 施設（25 名）の 61 名を分析対象とした。調査実施にあたっては、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た（承認番号 A2018-069）。

【結果】性別、年齢、利用期間、主たる使用薬物、教育歴、定期的な精神科通院の有無の基本属性について、介入群・対照群内で有意差を確認したところ、有意差は認められなかった。続いて、DAST-20 および SEAS2000 について、介入群 4 施設間・対照群 3 施設間の有意差について確認したところ、ベースライン・FU3 ヶ月・FU6 ヶ月の 3 時点において有意差が認められなかったため、介入群 4 施設・対照群 3 施設を合算して分析を進めた。次に、ベースライン・FU3 ヶ月・FU6 ヶ月の 3 時点における DAST-20 および SEAS2000 の二群間比較を実施したところ、SEAS2000 では FU6 ヶ月時点で介入群が対照群より有意に得点が高い（ $p=0.012$ ）ことが認められた。

【考察】介入群と対照群における二群間比較を実施した結果、FU6 か月時点において介入群が対照群より SEAS2000 得点が有意に高くなっており、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。今回の結果は、治療共同体エンカウンター・グループ自体の効果について支持するものであると考えられる。しかしながらこれらの調査結果は、測定できない施設間の要因を排除することができていない。今後の研究として、中断時系列デザインや傾向スコア分析を含め新たな調査デザインを検討していく必要がある。また、量的変数では測定できない治療共同体エン

カウンター・グループの意義を明らかにすることを目的に、インタビュー調査を実施している。今後、治療共同体エンカウンター・グループの意義についてより検証を進めたいと考える。

A. 研究目的

刑の一部執行制度の施行により、受け入れ先の一つとしてその役割を期待されているのが、民間支援団体ダルクである。ダルクの成果についてはこれまでも挙げられているが、直近のダルク利用者の追っかけ調査の結果によれば、1年半後の利用者（確認の取れた退所者含む）の完全断薬率は約7割¹⁾とされ、非常に高い断薬率が示されている。しかし一方で、当事者コミュニティゆえの困難も指摘されている。利用者の多様化に伴い、ダルク終了後の社会復帰する場の不足やスタッフの確保、利用者の精神症状への対応など支援における課題²⁾も積み上げられている。

このようなダルクの抱える課題や困難に対して当事者の経験的知識に依拠する伝統的な手法だけではなく、新たな選択肢を提供しようとする動きがある。ワークブックを用いた集団薬物再乱用防止プログラム SMARPP (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program)⁴⁾などの認知行動療法や当事者研究⁶⁾、そして、治療共同体エンカウンター・グループがその一つである。

治療共同体エンカウンター・グループは、治療共同体アプローチの重要かつ基盤となる要素（共感と責任のある関係、現実と向き合う機会、絶対的な誠実さ、個人の変化に不可欠な自己覚知）によって構成されており、それゆえに、治療共同体モデルにおいて象徴的なグループとされている⁷⁾。

報告者らは、2013年よりダルクでの治療共同体エンカウンター・グループの導入を開始し、2019年2月時点で9施設において実践され、2施設が導入準備中となっている。また、2014年より治療共同体研究会を隔月開催し、治療共同体エンカウンター・グループの基礎的な知識・技術を提供するための講義や体験グループなどを実施してきた。治療共同体エンカウンター・グループに従事する、または関心のある民

間支援団体スタッフ、専門職、研究者など25名前後が毎回参加している。研究会で実践上の課題を集約する中で、経験的知識・技術のみで治療共同体モデルを継続していくことの困難が明らかになり、2017年には「依存症者のためのエンパワメント・プログラムファシリテーションガイド」を開発した。また、治療共同体エンカウンター・グループの普及を目的に、研修やワークショップを開催している。

これらの治療共同体エンカウンター・グループについて、2013年よりAダルク、2014年よりBダルク、2015年よりCダルクにて治療共同体エンカウンター・グループを導入すると同時に、自己実現尺度 SEAS2000⁸⁾を用いた自記式アンケート調査による効果検証を実施してきた⁹⁾¹⁰⁾。その結果、治療共同体エンカウンター・グループ参加から半年後の効果が認められた一方で、長期的な効果については明らかにならなかった。また、これまでの研究の大きな課題として、施設内で対照群を設定することができないため、治療共同体エンカウンター・グループ以外の要因の影響を排除できないという課題が残された。その背景として、治療共同体エンカウンター・グループを導入するダルクは10人前後の規模が中心であり、施設内で対照群を設定することは困難であること、また、規模の大きなダルクでも、治療共同体エンカウンター・グループに参加するメンバーは、グループの適用に合わせた選抜メンバーであり、施設内で等質な対照群を設定することが困難であることが挙げられた。そのため、本研究では、治療共同体エンカウンター・グループを実施していないダルクを対照群として設定することを試み、治療共同体エンカウンター・グループの有効性を検証することを目的としている。

B. 研究方法

1. 対象者

治療共同体エンカウンター・グループを実施

する A・B・C・D ダルクにて定期的に治療共同体エンカウンター・グループに参加する利用者 78 名を介入群とした。また、F・G・H・I・J・K ダルク利用者 73 名を対照群とし、計 119 名を対象に自記式アンケート調査を実施した。対照群の選定においては、治療共同体エンカウンター・グループ導入に関心を持ち、報告者の主催する治療共同体研究会に参加したダルクに対し、調査の説明を実施し、同意を得られた施設を調査対象とした。

続いて、119 名のうち調査実施 3 時点でのデータのある介入群(36 名)および対照群(25 名)の 61 名を分析対象とした。調査対象除外となった介入群 10 名、対照群 58 名については、対照群のうち 45 名(3 施設)はグループ導入により調査対象外となり、その他は、中途退所・施設移動・就労などのほかのプログラムへの移行などの理由が挙げられる。

2. 調査方法

1) 調査項目

調査項目は、年齢、性別、利用期間、入所の契機となった主たる使用薬物、最終教育歴、精神科通院歴の有無、薬物依存・乱用の重症度尺度 DAST-20 と自己実現尺度 SEAS2000 である。自己実現尺度 SEAS2000 は、精神的健康を自己実現の観点から測定することを目的とした POI (Personal Orientation Inventory) をもとに、心理学領域で広く展開されるエンカウンター・グループの効果測定尺度として開発された SEAS (Self-Actualization Scale) の改訂版である。SEAS2000 は 4 因子(「ありのままの自己肯定」「とらわれからの解放」「自己信頼」「率直さ」) 24 項目で構成され、「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の 3 件法となっている。

本研究では、物質使用障害からの回復という視座によるダルク全体の効果ではなく、治療共同体エンカウンター・グループを通じた変化という視座によるグループの効果重視し、エンカウンター・グループに特化した尺度が適切であると判断した。

2) 実施方法および倫理的配慮

2018 年 4 月をベースラインとし、FU3 ヶ月、FU6 ヶ月の 3 時点において介入群・対照群ともに調査票を配布し、臨床研究に関する倫理指針等に基づき、人権の擁護、インフォームド・コンセント、研究参加による個人への不利益がないことを書面にて説明し、同意を得られた参加者を対象者とした。

また、施設への治療共同体エンカウンター・グループ導入に際しては、ダルクがセルフヘルプコミュニティであるという特性を尊重し、研究を前提とした調査依頼を実施していない。施設から治療共同体エンカウンター・グループ導入希望があった場合にのみ、グループ導入および調査についての説明を実施し、同意を得られた場合に調査を実施した。

本研究は国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 A2018-069)。

3) 分析方法

まず、ベースラインの各調査対象施設の基本属性変数の記述統計を算出し、各施設間の基本属性についての有意差の有無を確認した。続いて、介入群と対照群間の基本属性の有意差の有無を確認した。

次に、ベースライン・FU3 か月・FU6 か月時点の DAST-20 および SEAS2000 得点について、介入群の施設間および対照群の施設間の有意差について Kruskal Wallis 検定にて確認した。

続いて、ベースライン・FU3 か月・FU6 か月時点の DAST-20 および SEAS2000 得点における介入群と対照群間の有意差について Wilcoxon 符号付き順位検定にて確認した。

なお、統計学的解析には SPSS for Windows version24 を用い、両側検定にて $P<0.05$ を有意水準とした。

C. 研究結果

1. 対象施設の基本属性について

各対象施設の概要および基本属性を表 1,2 に示す。介入群 36 名では、性別は全員が男性、年齢の中央値(四分位)は 43 (35.25,47) 歳であった。利用期間は 6 ヶ月未満が 11 名(32.4%)と

最も多く、続いて1～3年が10名(29.4%)、3年以上が8名(23.5%)、6ヶ月～1年が5名(14.7%)であった。入所の契機となった主たる使用薬物は、覚せい剤が25名(71.4%)と最も多く、続いて鎮咳剤3名(8.6%)、危険ドラッグ2名(5.7%)とアルコール2名(5.7%)、大麻1名(2.9%)と処方薬1名(2.9%)とその他4名(2.9%)であった。教育歴については、中学校卒業が12名(33.3%)と最も多く、続いて高校卒業が11名(30.6%)、その他7名(19.4%)、大学卒業6名(16.7%)であった。定期的な精神科通院の有無については、26名72.2%が定期的に精神科通院をしていた。DAST-20では、やや重いが19名(52.8%)と最も多く、続いて重度12名(33.3%)、中等度4名(11.1%)、軽度1名(2.8%)であった。

対照群3施設25名では、性別は全員が男性、年齢の中央値(四分位)は42(34,47.5)歳であった。利用期間は1～3年が9名(37.5%)と最も多く、続いて3年以上8名(33.3%)、6ヶ月未満4名(16.7%)、6ヶ月～1年が3名(12.5%)であった。入所の契機となった主な使用薬物は、覚せい剤が16名(64.0%)と最も多く、続いて危険ドラッグ3名(12.0%)と処方薬が3名(12.0%)、アルコール2名(8.0%)、鎮咳剤1名(4.0%)、大麻とその他は0(0%)であった。教育歴については、中学校卒業が13名(52.0%)と最も多く、続いて高校卒業6名(24.0%)、大学卒業3名(12.0%)とその他が3名(12.0%)であった。定期的な精神科通院の有無については、21名84.0%が定期的に精神科通院をしていた。DAST-20では、やや重いが12名(48.0%)と最も多く、続いて重度6名(24.0%)、軽度5名(20.0%)、中等度2名(8.0%)であった。

続いて、介入群・対照群における各施設間の基本属性についての有意差を確認したところ、有意差は認められなかった。

次に、介入群と対照群間の基本属性についての有意差を確認したところ、性別、年齢、利用期間、使用薬物、教育歴、定期的な精神科通院の有無、重症度について有意差は認められなかった(表3)。

2. 各対象施設のDAST-20およびSEAS2000について

各対象施設におけるベースライン・FU3か月・FU6か月時点のDAST-20およびSEAS2000得点について表4、5に示す。対照群のうちF・G・IダルクについてはFU3か月以降に、治療共同体エンカウンター・グループが導入されたため、FU6ヶ月時点では調査対象外となった。

DAST-20およびSEAS2000得点について、ベースライン・FU3か月・FU6か月の3時点において、介入群・対照群ともに有意差は認められなかった。

介入群、対照群ともに各施設間でのDAST-20およびSEAS2000得点について、ベースライン・FU3か月・FU6か月時点ともに、有意差は認められなかったため、介入群4施設、対照群3施設を合算してその後の分析を進めた。

3. 介入群・対照群におけるDAST-20およびSEAS2000

ベースライン・FU3か月・FU6ヶ月の3時点における介入群36名、対照群25名のDAST-20およびSEAS2000得点について表6に示す。

DAST-20ベースラインにおいて、61名全体の中央値(四分位)は14(11.5,16)、介入群では14(12.25,16)、対照群では14(10,15.5)であり、二群間の有意差は認められなかった。

DAST-20FU3ヶ月において、全体の中央値(四分位)は14(11,15)、介入群では14(12,16)、対照群では14(10.5,15)であり、二群間の有意差は認められなかった。

DAST-20FU6ヶ月において、全体の中央値(四分位)は13(10,15)、介入群では13.5(9.25,15)、対照群では13(10.5,15)であり、二群間の有意差は認められなかった。

続いて、SEAS2000ベースラインにおいて、全体の中央値(四分位)は23(19,27)、介入群では24.5(20,27.75)、対照群では22(18,25.5)であり、二群間の有意差は認められなかった。

SEAS2000FU3ヶ月における全体の中央値(四分位)は24(20,27.5)、介入群では25(20.25,28)、

対照群では 22 (19,26) であり、二群間の有意差は認められなかった。

SEAS2000FU6 ヶ月において、全体の中央値(四分位)は 24 (19.5,28)、介入群では 26 (21,29)、対照群では 20 (18.5,24.5) であり、介入群が対照群より有意に得点が高かった ($p=0.012$)。

D. 考察

本研究では、民間支援団体ダルクにおける回復プログラムとして、治療共同体エンカウンター・グループに着目し、新たに対照群を設定することを試み、その効果について検証した。対照群の設定においては、治療共同体エンカウンター・グループ未実施の施設を対象としたが、その選定においては、ダルクがセルフヘルプコミュニティであるという特性を尊重し、研究を前提とした導入・調査依頼を実施していない。研究を主導としたプログラムの導入により、ダルクのセルフヘルプ機能を阻害することがないよう配慮するためである。そのため、介入群は関東圏であるのに対し、対照群は西日本が多くなっており、地域性に偏りが見られた。そこで、年齢・入所期間・使用薬物、教育歴、精神科受診の有無、DAST-20 を用いて二群間の偏りについて確認した上で、アウトカムである SEAS2000 得点の有意差を確認した。

介入群・対照群間では、3 時点全てにおいて DAST-20 の有意差が認められなかった。この背景として、調査対象者はダルクでの入所生活中であるため、入所時点から DAST-20 に関わる要因が変化していないこと、また、入所という薬物使用から物理的に一定の距離を置くことができる環境という点では施設間の差異が生じにくいことが考えられる。

介入群と対照群の二群間比較において、SEAS2000 については FU6 か月時点で介入群は対照群より有意に得点が高く、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。これまでの研究で認められた効果は、治療共同体エンカウンター・グループ以外の影響が排除しきれない課題が残されていたが、本調査結果は、治療共同体エンカウンター・グループ自体の効

果について支持する 1 つの結果であると考えられる。

以上の調査結果には以下の限界が挙げられる。本調査で確認した二群間の変数(基本属性・DAST-20) 以外にも、二群間の差異に影響を及ぼす要因が想定される。施設規模、スタッフ数、スタッフの経験年数、メンバー間の関係など測定していない、または測定することができない変数の影響については本研究では検証することができない。これらの課題は、観察研究の限界であると考えるが、今後より適切かつ実現可能な調査デザインを検討する必要がある。

今後の研究として、2 つの調査方法が考えられる。1 つは、ダルク内での中断時系列デザインである。治療共同体エンカウンター・グループの未実施期間と実施期間の得点変化の差異を検証する方法であるが、調査の有無にかかわらず、プログラムを段階的に設定している機関が限られていることが課題となる。2 つ目は傾向スコアによる変数調整である。二群間の交絡要因を可能な限り排除することを目的に、複数の変数について傾向スコアを算出し、傾向スコアの近い対象者を二群間でマッチングする手法である。先述した測定不可能な変数については検証できないという課題は残されるものの、調査項目上の二群間の差異を調整することは可能となる。今後、以上の調査方法も含め、さらにデータを蓄積し分析を進めていきたい。また、本調査を含め、量的変数では測定できない治療共同体エンカウンター・グループの意義を明らかにすることを目的に、インタビュー調査を実施しており、今後分析を進めていきたい。

E. 結論

本研究では、民間支援団体ダルクにおける回復プログラムとして、新たに導入されつつある治療共同体エンカウンター・グループに着目し、対照群を設定し効果を検証した。治療共同体エンカウンター・グループを実施するダルク 4 施設を介入群とし、治療共同体エンカウンター・グループに関心があり未実施のダルク 3 施設を対象群として二群間比較を実施した。性別、年

齢、利用期間、使用薬物、教育歴、定期的な精神科通院の有無、DAST-20の基本属性について、介入群4施設間・対照群3施設間で有意差が認められなかったため、合算してその後の分析を進めた。

ベースライン・FU3カ月・FU6か月時点での、DAST-20およびSEAS2000の二群間比較の結果、DAST-20では有意差が認められない一方で、SEAS2000ではFU6か月時点で介入群が対照群より有意に得点が高く、介入群では精神的健康度が高まっていることが示唆された。これは、治療共同体エンカウンター・グループ自体の効果について支持する1つの結果であると考えられる。

しかし、これらの調査結果は測定できない施設間の要因を排除することができていないため、今後の研究として、中断時系列デザインや傾向スコア分析を含め新たな調査デザインを検討していく必要がある。また、量的変数では測定できない治療共同体エンカウンター・グループの意義を明らかにすることを目的に、インタビュー調査を実施しており、今後分析を進めることで、治療共同体エンカウンター・グループの意義を明らかにしていきたい。

F. 参考文献

- 1) 嶋根卓也,近藤あゆみ,米澤雅子,近藤恒夫,松本俊彦:民間支援団体利用者のコホート調査と支援の課題に関する研究.厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野) 刑の一部執行猶予下における薬物依存者の地域支援に関する政策研究.平成29年度総括・分担研究報告書,2018.
- 2) 嶋根卓也,森田展彰,末次幸子,岡坂昌子:薬物依存症者による自助グループのニーズは満たされているか—全国ダルク調査から—日本アルコール・薬物医学会雑誌41,100-107,2006.
- 3) 特定非営利活動法人東京ダルク平成21年度社会福祉推進費補助金事業実施報告書 依存症回復途上者の社会復帰に向けての

就労・就学支援事業.2010.

- 4) 小林桜児,松本俊彦,大槻正樹,遠藤桂子,奥平謙一,原井宏明,和田清:覚せい剤依存症患者に対する外来再発予防プログラムの開発—Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program (SMARPP)—.日本アルコール・薬物医学会雑誌,4,507-521,2007.
- 5) 松本俊彦:薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して.精神医学,54,1103-1110,2012.
- 6) 上岡陽江:女性薬物依存症者の当事者研究.臨床心理学増刊第9号みんなの当事者研究,109-114,2017.
- 7) De Leon,G.: The therapeutic community: theory,model,and method. Springer,2000.
- 8) 坂中正義:改訂版自己実現スケール(SEAS2000)作成の試み.福岡教育大学紀要,52,181-188,2003.
- 9) 引土絵未,岡崎重人,山崎明義,松本俊彦:日本型治療共同体モデルの試行と効果について.日本アルコール・薬物医学会雑誌,50,206-221,2014.
- 10) 引土絵未,岡崎重人,加藤隆,山本大,山崎明義,松本俊彦:治療共同体エンカウンター・グループの効果とその要因について:日本アルコール・薬物医学会雑誌,53(2),83-94,2018.

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 引土絵未,岡崎重人,加藤隆,山本大,山崎明義,松本俊彦:治療共同体エンカウンター・グループの効果とその要因について,日本アルコール・薬物医学会雑誌,53(2),83-94,2018.

2. 学会発表

- 1) 引土絵未,岡崎重人,加藤隆,山本大,山崎明義,松本俊彦,嶋根卓也:民間回復支援施設におけるTCエンカウンター・グループの適用に関する研究.平成30年度ア

ルコール・薬物依存関連学会合同学術総会，
国立京都国際会館，2018.9.10.

なし

2.実用新案登録

なし

3. その他

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む)

1.特許取得

表1 介入群における各施設基本属性

介入群		A (n=7)	B (n=10)	C (n=12)	D (n=7)	全体 (n=36)	
地域		関東	関東	北関東	関東		
中央値 (四分位数)							p
年齢		44 (31,48)	42.5 (37.5,45.75)	41 (32.25,46.25)	42.5 (40,55)	43 (35.25,47)	0.896
性別		n (%)					
性別	男性	7 (100)	10 (100)	12 (100)	7 (100)	36 (100)	-
利用期間	6か月未満	1 (16.7)	2 (20.0)	5 (41.7)	3 (50.0)	11 (32.4)	0.175
	6か月～1年	3 (50.0)	1 (10.0)	1 (8.3)	0 (0)	5 (14.7)	
	1～3年	2 (33.3)	2 (20.0)	3 (25.0)	3 (50.0)	10 (29.4)	
	3年以上	0 (0)	5 (50.0)	3 (25.0)	0 (0)	8 (23.5)	
主たる対象薬物	覚せい剤	6 (100)	7 (70.0)	7 (58.3)	5 (71.4)	25 (71.4)	0.228
	大麻	0 (0)	0 (0)	1 (8.3)	0 (0)	1 (2.9)	
	鎮咳剤	0 (0)	3 (30.0)	0 (0)	0 (0)	3 (8.6)	
	処方薬	0 (0)	0 (0)	1 (8.3)	0 (0)	1 (2.9)	
	危険ドラッグ	0 (0)	0 (0)	2 (16.7)	0 (0)	2 (5.7)	
	アルコール	0 (0)	0 (0)	1 (8.3)	1 (14.3)	2 (5.7)	
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (14.3)	1 (2.9)		
教育歴	中学卒	2 (28.6)	4 (40.0)	4 (33.3)	2 (28.6)	12 (33.3)	0.587
	高校卒	4 (57.1)	2 (20.0)	3 (25.0)	2 (28.6)	11 (30.6)	
	大学卒	1 (14.3)	2 (20.0)	3 (25.0)	0 (0)	6 (16.7)	
	その他	0 (0)	2 (20.0)	2 (16.7)	3 (42.9)	7 (19.4)	
通院 精神科	有	6 (85.7)	6 (60.0)	7 (58.3)	7 (100)	26 (72.2)	0.157
	無	1 (14.3)	4 (40.0)	5 (41.7)	0 (0)	10 (27.8)	
ベースライン DAST-20	軽度	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (14.3)	1 (2.8)	0.348
	中等度	2 (28.6)	1 (10.0)	0 (0)	1 (14.3)	4 (11.1)	
	やや重い	2 (28.6)	7 (70.0)	7 (58.3)	3 (42.9)	19 (52.8)	
	重度	3 (42.9)	2 (20.0)	5 (41.7)	2 (28.6)	12 (33.3)	

Pearson カイ二乗検定, Kruskal-Wallis 検定

表2 対照群における各施設基本属性

対照群	H (n=13)	J (n=6)	K (n=6)	全体 (n=25)		
地域	中国	九州・沖縄	九州・沖縄			
	中央値 (四分位数)				p	
年齢	42 (34,46.5)	37 (28.5,43.25)	53 (39.25,57.75)	42 (34,47.5)	0.073	
	n (%)					
性別	男性	13 (100)	6 (100)	6 (100)	25 (100)	-
利用期間	6か月未満	1 (8.3)	1 (16.7)	2 (33.3)	4 (16.7)	0.471
	6か月～1年	2 (16.7)	0 (0)	1 (16.7)	3 (12.5)	
	1～3年	4 (33.3)	2 (33.3)	3 (50.0)	9 (37.5)	
	3年以上	5 (41.7)	3 (50.0)	0 (0)	8 (33.3)	
主たる使用薬物	覚せい剤	9 (69.2)	2 (33.3)	5 (83.3)	16 (64.0)	0.551
	大麻	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
	鎮咳剤	0 (0)	1 (16.7)	0 (0)	1 (4.0)	
	処方薬	2 (15.4)	1 (16.7)	0 (0)	3 (12.0)	
	危険ドラッグ	1 (7.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	3 (12.0)	
	アルコール	1 (7.7)	1 (16.7)	0 (0)	2 (8.0)	
	その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	
教育歴	中学卒	8 (61.5)	2 (33.3)	3 (50.0)	13 (52.0)	0.436
	高校卒	3 (23.1)	1 (16.7)	2 (33.3)	6 (24.0)	
	大学卒	2 (15.4)	1 (16.7)	0 (0)	3 (12.0)	
	その他	0 (0)	2 (33.3)	1 (16.7)	3 (12.0)	
通院 精神科	有	9 (69.2)	6 (100)	6 (100)	21 (84.0)	0.111
	無	4 (30.8)	0 (0)	0 (0)	4 (16.0)	
DAST-20 ベークライン	軽度	3 (23.1)	1 (16.7)	1 (16.7)	5 (20.0)	0.524
	中等度	1 (7.7)	0 (0)	1 (16.7)	2 (8.0)	
	やや重い	7 (53.8)	4 (66.7)	1 (16.7)	12 (48.0)	
	重度	2 (15.4)	1 (16.7)	3 (50.0)	6 (24.0)	

Pearson カイ二乗検定, Kruskal-Wallis 検定

表3 介入群・対照群における基本属性の二群間比較

		介入群 (n=36)	対照群 (n=25)	全体 (n=61)	
中央値 (四分位数)					
年齢		43 (35.25,47)	42(34,47.5)	42 (34.5,47)	0.059
n (%)					
性別	男性	36 (100)	25 (100)	61 (100)	-
利用期間	6か月未満	11 (32.4)	4 (16.7)	15 (25.9)	0.516
	6か月～1年	5 (14.7)	3 (12.5)	8 (13.8)	
	1～3年	10 (29.4)	9 (37.5)	19 (32.8)	
	3年以上	8 (23.5)	8 (33.3)	16 (27.6)	
主たる対象 (薬物)	覚せい剤	25 (71.4)	16 (64.0)	41 (68.3)	0.591
	大麻	1 (2.9)	0 (0)	1 (1.7)	
	鎮咳剤	3 (8.6)	1 (4.0)	4 (6.7)	
	処方薬	1 (2.9)	3 (12.0)	4 (6.7)	
	危険ドラッグ	2 (5.7)	3 (12.0)	5 (8.3)	
	アルコール	2 (5.7)	2 (8.0)	4 (6.7)	
	その他	1 (2.9)	0 (0)	1 (1.7)	
教育歴	中学卒	12 (33.3)	13 (52.0)	25 (41.0)	0.532
	高校卒	11 (30.6)	6 (24.0)	17 (27.9)	
	大学卒	6 (16.7)	3 (12.0)	9 (14.8)	
	その他	7 (19.4)	3 (12.0)	10 (16.4)	
精神科通院	有	26 (72.2)	21 (84.0)	47 (77.0)	0.282
	無	10 (27.8)	4 (16.0)	14 (23.0)	
DAST-20 ベースライン	軽度	1 (2.8)	5 (20.0)	6 (9.8)	0.165
	中等度	4 (11.1)	2 (8.0)	6 (9.8)	
	やや重い	19 (52.8)	12 (48.0)	31 (50.8)	
	重度	12 (33.3)	6 (24.0)	18 (29.5)	

Pearson カイ二乗検定, Mann-Whitney の U 検定

表4 介入群におけるベースライン・FU3 ヶ月・FU6 ヶ月時点の DAST-20 および SEAS2000 得点

介入群	A (n=7)	B (n=10)	C (n=12)	D (n=7)	全体 (n=36)	
中央値 (四分位数)						p
DAST-20 ベースライン	15 (10,17)	14 (12,15.25)	14.5 (13,17)	14.0 (10,16)	14 (12.5,16)	0.778
DAST-20 FU3 カ月	15 (12,17)	14.5 (11.25,16.25)	13.5 (10.5,14.75)	14 (4,17)	14 (12,16)	0.641
DAST-20 FU6 か月	10 (9,13)	14 (12.25,16)	13.5 (8.75,15)	14 (3,15)	13.5 (9.25,15)	0.288
SEAS2000 ベースライン	23 (20,28)	25.5 (20.75,28)	23.5 (19.25,28.75)	25 (16,28)	24.5 (20,27.75)	0.893
SEAS2000 FU3 カ月	21 (19,27)	23.5 (22.5,31)	26 (20.5,28.75)	26 (18,27)	25 (20.25,28)	0.742
SEAS2000 FU6 か月	28 (24,29)	25 (20.75,30.75)	26.5 (20.25,28.75)	23 (18,31)	26 (21,29)	0.872

Kruskal-Wallis 検定

表5 対象群におけるベースライン・FU3 ヶ月・FU6 ヶ月時点の DAST-20 および SEAS2000 得点

対象群	H (n=13)	J (n=6)	K (n=6)	全体 (n=25)	
中央値 (四分位数)					p
DAST-20 ベースライン	14 (7.5,15)	13 (9.25,15.25)	13.5 (8.75,16.25)	14 (10,15.5)	0.844
DAST-20 FU3 カ月	14 (11.5,15)	14.5 (8.75,16)	12 (9,14)	14 (10.5,15)	0.321
DAST-20 FU6 か月	14 (13,15.5)	11.5 (8.25,14.25)	11.5 (8.25,14.5)	13 (10.5,15)	0.240
SEAS2000 ベースライン	23 (17.5,26)	19.5 (16.75,21.25)	25 (16.5,26.5)	22 (18,25.5)	0.267
SEAS2000 FU3 カ月	24 (20,27.5)	19 (13.75,22.75)	23.5 (19.75,30.25)	22 (19,26)	0.123
SEAS2000 FU6 か月	21 (20,27)	19 (17,21)	22 (17.5,27.25)	20 (18.5,24.5)	0.228

Kruskal-Wallis 検定

表6 ベースライン・FU3 ヶ月・FU6 ヶ月時点の DAST-20 および SEAS2000 得点二群間比較

	介入群 (n=36)	対照群 (n=25)	全体 (n=61)	
	中央値 (四分位数)			
DAST-20 ベースライン	14 (12.25,16)	14 (10,15.5)	14 (11.5,16)	0.159
DAST-20 FU3 カ月	14 (12.16)	14 (10.5,15)	14 (11,15)	0.344
DAST-20 FU6 カ月	13.5 (9.25,15)	13 (10.5,15)	13 (10,15)	0.802
SEAS2000 ベースライン	24.5 (20,27.75)	22 (18,25.5)	23 (19,27)	0.091
SEAS2000 FU3 カ月	25 (20.25,28)	22 (19,26)	24 (20,27.5)	0.148
SEAS2000 FU6 カ月	26 (21,29)	20 (18.5,24.5)	24 (19.5,28)	0.012*
Wilcoxon 符号付き順位検定				*p<0.05